

米欧回覧実記

大森 海太

明治維新から間もない一八七一年（明治四年）、新政府は特命全權大使岩倉具視を团长として、木戸孝允、大久保利通、伊藤博文以下総勢一〇七名からなる使節団を派遣し、一年半かけて世界を一周した。

サンフランシスコに上陸して開通したばかりの大陸横断鉄道でニューヨーク、ワシントンに至り、大西洋を渡ってイギリス、フランス、ドイツ、ロシア、イタリアほか欧州各国を歴訪、最後はマルセイユからインド洋経由帰国した。

この間の記録は、のちに随員の久米邦武（もと佐賀藩士）によつて『米欧回覧実記』全百巻としてまとめられた。

使節団の本来の目的は、幕末に各国と締結された不平等条約の改正であり、これについては残念ながらさらに二十数年の歳月を要したものの、『実記』には欧米各国の風土、国民性、産業などが当時の日本人の目にどのように映ったか、克明に記録されている。

当時アメリカは南北戦争（一八六五）の直後で、ヨーロッパでもイタリア王国（一八六一）や、普仏戦争の結果ドイツ帝国（一八七二）

がスタートしたばかりであったが（フランスは第三共和政に移行）、一行は各地で熱烈な歓迎を受け、グラント大統領（米）、ヴィクトリア女王（英）、皇帝アレクサンドル二世（露）に拝謁し、また宰相ビスマルク（独）ほか各国で要人たちから宴席に招待されたとのことである。

使節団は各種生産設備（工場）や鉄道、港湾などインフラをつぶさに視察して回つて西洋と東洋の差を痛感し、日本も遅ればせながら近代化に邁進しなければと提言する。

また一方でロシアの後進性を指摘し、さらに東洋の大国中国は旧弊にアグラをかいて怠惰に流れ、アヘン戦争で西欧に蚕食された「反面教師」として描かれているのが印象的である。

このような記録を大久保喬樹という先生が現代語に「縮訳」したものが文庫本で出版されていて、地図や挿絵も豊富で読みやすくまとめられている。

この時代の日本の立ち位置が手に取るように理解できた。